

タイトル	2つの『コト』が生むまちづくり
提案者 (所属・代表者)	角田崇一郎、川上義人 (株式会社石本建築事務所プロジェクト推進室)、 梶原恒平 (千葉大学大学院工学研究科建築・都市科学専攻)
整理番号	44
賞	金賞

【注意事項】

本資料は、平成24年に杉並区が開催した「これからの荻窪駅周辺まちづくりを考えるアイデアコンペ（以下、アイデアコンペ）」において応募者から提案された一作品です。今後の荻窪におけるまちづくりの方向性を決定するものではありません。

アイデアコンペの詳細については、以下のページをご覧ください。

<https://www.city.suginami.tokyo.jp/s094/6497.html>

2つの『コト』が生むまちづくり

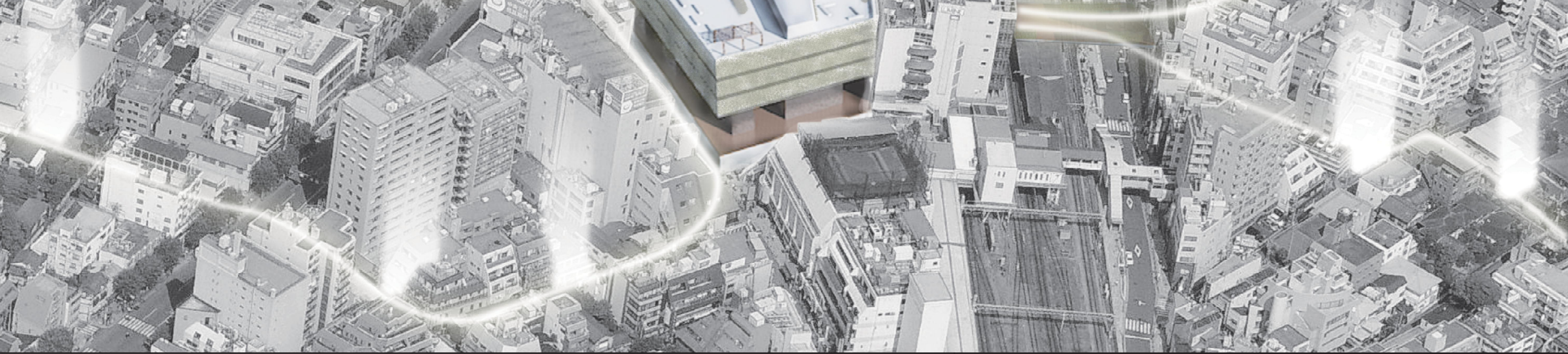
荻窪、西荻窪、高円寺、阿佐ヶ谷・・・
杉並区などのまちも共通して個性的な個人商店の集積が、
まちの表情を豊かにしている。

歴史を遡ると、戦後間もなく個人商店の集積が始まった荻窪は、
水の波紋の様に連鎖して広がった結果、賑わいを生んできた。

小さな出来事集積によって賑わいを生むことが、
荻窪らしいまちづくりを持続させると考える。

小さな『事(出来事)』を創る操作の繰り返し、
『言(言葉、コミュニティ、賑わい)』の連続を生みだすような、
2つの『コト』による荻窪のまちづくりを提案する。

この提案によって、時代が変化しても、
杉並らしさ、荻窪らしさが持続するまちを目指す。



Phase1 仕組みを整える

荻窪駅周辺まちづくり会議を中心に、住民参加で「まちづくりの土台」づくりを行う。同時に、学生やボランティアを巻き込んだエリアマネジメントにより、会議の結果を自に見る形で実際のまちに還元する。また、南北商店街を中心に、まちの賑わい創出に繋がるプロジェクトを展開し、荻窪のアピールを行う。

【(仮称)荻窪駅周辺まちづくり会議】

- 市民
- 町内会長
- 杉並区
- 地元病院
- 学校
- NPO
- ボランティア

【(仮称)荻窪駅周辺まちづくり会議】

- 市民
- 町内会長
- 杉並区
- 地元銀行
- 地元企業
- タウンセブン

【(仮称)荻窪駅周辺まちづくり会議】

- 市民
- 町内会長
- 杉並区
- 地元銀行
- 地元企業
- タウンセブン

Phase2 「点」を整備する

住民主導で定められた仕組みやデザインコードを基に、空間整備を行う。空間整備の対象は、公園や普通寺川、空き家や各商店街の空き店舗である。整備された空間は、市民活動の場であると同時に、小学校、病院、行政施設の機能の一部をまちなかに設置する場となる。またソフトの支援も行われる。

【(仮称)荻窪駅周辺まちづくり会議】

- 市民
- 町内会長
- 杉並区
- 地元病院
- 学校
- NPO
- ボランティア

【(仮称)荻窪駅周辺まちづくり会議】

- 市民
- 町内会長
- 杉並区
- 地元銀行
- 地元企業
- タウンセブン

Phase3 「点」を連続させる(タウンセブン更新)

荻窪駅周辺まちづくり会議を中心に繋がった「付き合ひのある」地域の主体が、協働でタウンセブンを更新し、南北の連絡通路を実現する。2つのまちで培われた『コト』は連続し、南北をまたいだネットワークとして、回遊性のあるまちとなる。

【(仮称)荻窪駅周辺まちづくり会議】

- 市民
- 町内会長
- 杉並区
- 地元病院
- 学校
- NPO
- ボランティア

【(仮称)荻窪駅周辺まちづくり会議】

- 市民
- 町内会長
- 杉並区
- 地元銀行
- 地元企業
- タウンセブン

荻窪らしいまちへの3つの手がかかり

荻窪の成り立ち

「小さな『事』から始まった荻窪」

- 1891 甲武鉄道開通
- 1946 荻窪振興商店街開業
- 1949 天沼陸橋完成
- 1981 タウンセブン開業
- 2012 (仮称)荻窪駅周辺まちづくり会議発足
- 2031 タウンセブン50周年
- 2032 更なる少子高齢化社会へ

「タウンセブンの可能性」

タウンセブンは、荻窪らしいまちづくりをスタートさせる可能性を秘めている。1981年、タウンセブン(・ルミネ)は、荻窪振興商店街の一角を再開発して誕生した。タウンセブンの誕生により、防災上の危険性、来客数の減少など、かつての荻窪駅北口周辺が抱えていた問題が解決された。現在でもペDESTリアンテッキと一体化した建築として都市に寄り添い、地元住民の馴染みの場所として、荻窪のアイデンティティを受け継いでいる。2031年、タウンセブンは開業50年となり、建替更新時期を迎える。現在の荻窪が抱える南北分断等の諸問題の解決を、再び、荻窪のアイデンティティであるタウンセブンを中心に図ることは、荻窪らしい、馴染み深いまちづくりを可能にさせる。

「2つの“まち”の存在」

1949年、天沼陸橋が完成したことで、中央線、青梅街道を境に南北のまちが完全に分断された。その結果、荻窪駅の南北に2つのまちが存在している。この2つのまちは、一方は面的に、一方は線的に、それぞれ異なる特徴を持つ。

「少子高齢化、外国人増加」

20年後、日本は少子高齢化社会を迎える。加えて外国人の増加が予想される。杉並区も日本社会が抱える課題を共有しながら、全域に広がる住居地域のための住み良いまちづくりを目指すことになるであろう。ここ荻窪でも駅を中心に広がる住居地域に住む住民(子供、高齢者、外国人)にとって住み良い環境を得られる、新しい取り組みが必要不可欠である。

荻窪らしいまちへの3つのカギ

「2つの『コト』によるまちづくり」

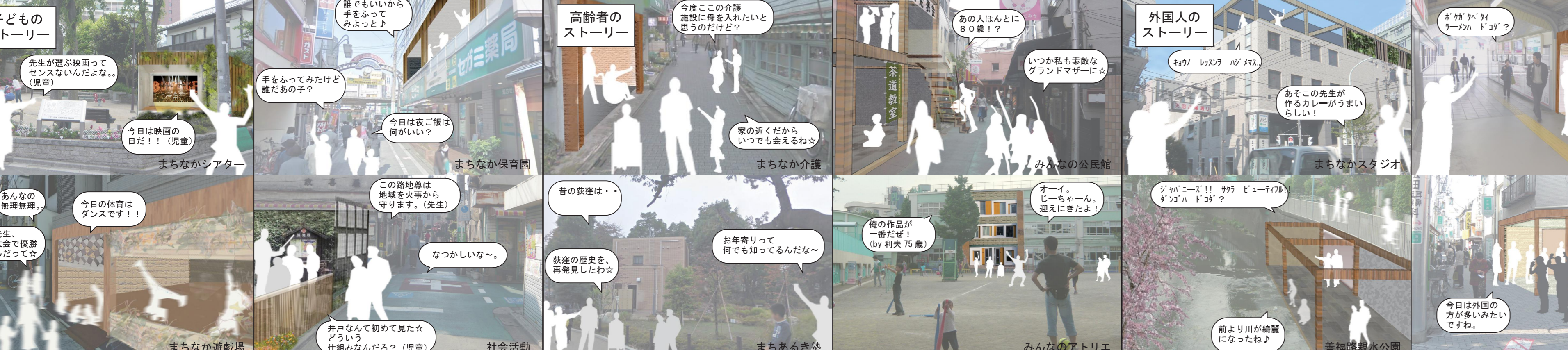
荻窪が現在抱えている、南北の分断を今すぐに解決するのではなく、タウンセブンが更新時期を迎えるまでの20年は、2つの『コト』によるまちづくりを展開する。具体的な手順は、
①人間関係の構築や、まちづくりの仕組みを整え、
②「点(既存の空間・場所)」を整備して、そこに『事』を加える。既存の空間に新しい『事』が加わることで、新しい『言』が生まれ、2つの『コト』のある荻窪らしさのあるまちとなる。

「荻窪にしかない『コト』」

南北の2つのまちには、それぞれ小学校や商店街などが位置し、特徴の違うまちを、さらに個性的にしている。そのような特徴ある既存の空間を「点」として、『事』を加える。それにより、荻窪にしかない『コト』が生まれる。

「ストーリーのあるまち」

物理的な南北分断の課題は、20年間で構築された主体間の連携でタウンセブンの周辺を巻き込んだ更新で、南北を横断する連絡通路を実現し、その解決を図る。連絡通路により整備された「点」が、線として連続し南北をまたがるストーリーを描き出す。『コト』の連続は、荻窪らしいまちをつくり、居住者の生活を彩り、来街者にとって表情豊かなまちを演出する。



荻窪らしさが持続するまち

荻窪らしい空間を利用した「点」で起った『コト』は、南北に伸びる「線」としてタウンセブンに集中し、影響を与える。タウンセブンは、その影響により『コト』を集約したまちとして、タウンセブン内で生まれた交流や『コト』を荻窪全体に広げる。この相互関係により、持続性のある荻窪らしいまちを形成する。